異郷の風景（上）――

ラフカディオ・ハーンとエドワード・S・モース

牧野陽子

一、ラフカディオ・ハーンとエドワード・S・モース
二、人力車の風景 ― 「日本その日その日」と「東洋の土を踏んだ日」
三、開かれた世界 ― 細部の豊かさ
四、〝寺へゆけ〟 ― 夜のなかの昼
五、無音の空間 ― 内なる交響へ

一、ラフカディオ・ハーンとE・S・モース

ラフカディオ・ハーン（一八五〇―一九〇四）は一八九〇年の春四月に来日し、八月に松江の尋常中学校へ赴任するまでの四ヶ月間半あまりを、横浜で過ごした。横浜到着から、翌年の秋に松江を去るまでの見聞を記したの

が、ハーンの十二冊におよぶ日本関係の著作のうち最初の作品集となる『知られぬ日本の面影』（*Glimpses of Unfamiliar Japan*, 一八九四年）であり、その冒頭を飾る「東洋の土を踏んだ日」（"My First Day in the Orient"）は、横浜到着直後の一日のスケッチである。

ハーンは、来日前に西インド諸島の滞在記『仏領西インド諸島の二年間』（一八九〇年）をすでに刊行していたが、『知られぬ日本の面影』におさめられた横浜や出雲地方での見聞を記すハーンの筆致も巧みであり、「東洋の土を踏んだ日」は、日本のみずみずしい第一印象が描かれた作品として読まれてきた。ハーンの日本に関する言説について、これまで重ねて指摘されてきたのは、ハーンが、たとえばバジル・ホール・チェンバレンやイザベラ・バード、ピエール・ロティなどと異なって、西洋文明とキリスト教を絶対的優位におくことをしなかったということである。　だが、来日外国人のなかで、日本の文物に魅了され、ここに優れた古来の文化があると西洋に向かって主張した人は、ハーンだけではない。そして、ハーンの日本描写の特質は、ハーン同様に、共感的なまなざしを日本に向けた人の文章と読み比べてみると、一層はっきりとみえてくるように思われる。

本論は、明治初期に来日して大森貝塚の発見など大きな足跡を残したエドワード・モース（Edward Sylvester Morse, 一八三八―一九二五）が、日記『日本その日その日』（*Japan Day by Day*, 一九一七年）のなかに記した横浜到着後の日本の印象と比較して、両者の記述の相違をみることで、ハーンの作品「東洋の土を踏んだ日」のさらなる解釈を試みるものである。ハーンは、やがて日本の怪異譚の再話に力をそそぐようになるのだが、「東洋の土を踏んだ日」は、ハーンの日本での日々がどのように始まったかをうかがわせるだけでなく、ハーンの著述の向かう方向も暗示しているように思われるのである。

ハーンとモース、来日の年はハーンが一八九〇年、モースは一八七七年と、時期は異なるものの、二人の日本体験には、共通するところがいくつもある。

アメリカから太平洋を渡って横浜に到着したとき、ハーンもモースも三十九歳だった。ハーンはジャーナリスト・作家として、モースは生物学者として、それぞれアメリカでキャリアをつみ、ある程度社会的に評価も得ていた。そして二人とも、最初は数ヶ月の滞在のつもりで来日した。

ハーンは日本に関する記事を書いてニューヨークの雑誌社「ハーパーズ」社に送るため、画家のウェルドンを伴って来たものの、まもなくウェルドンだけが帰国し、ハーンは日本にとどまる。松江中学校、熊本第五高等学校をへて、最後は東京大学で英文学を講じ、その間に、日本について数多くの作品を書き続け、日本に帰化して、小泉八雲として一九〇四年に生を終えた。

一方のモースは、専門の腕足類が日本近海に豊富にあると聞き知り、ひと夏を江ノ島で調査収集のために過ごすつもりで来たが、モースがかつてミシガン大学で進化論の講義をしたときに聴講していた外山正一に請われて、東京大学の初代の動物学教授となった。（ちなみにハーンを東大に招聘したのも、外山だった。）モースは二年余の滞在中、進化論を紹介し、科学的考古学の講義などを行う一方で、日本人の生活文化にも深い関心を寄せ、たくさんのスケッチや写真を残した。また日本の民具や陶磁器を収集し[1]、その「モース・コレクション」が今は陶磁器類はボストン美術館に、民具類はボストン近郊セイラムのピーボディ博物館に所蔵されている。帰国後、一八八六年に『日本人のすまい』(*Japanese Homes and their Surroundings*)を出版し、アメリカ各地で日本と日本文化についての講演を晩年にいたるまで続けたことでも知られる。

二人とも多くの日本人弟子に慕われ、その著作は欧米の日本文化の理解を深めることに貢献した。モースは、『日本人のすまい』の序文で、民族学者が研究対象である異文化を観察するときには「偏見の煤で汚れた眼鏡」で見るよりは「薔薇色の眼鏡」をかける方がましだ、必要なのは「対象に対する共感の精神である」[2]と述べて、一方的に異国の状況を中傷する人々を批判しているが、ハーンの言葉かと思うような、ストレートな意見である。このように二人は、十九世紀西洋の価値観にとらわれることを意識的に回避したが、今ひとつ二人を当時の他の多くの来日外国人とわかつのは、キリスト教信仰との距離感かもしれない。興味深いことに、ハーンは幼いころ、地獄の恐ろしさばかり説く従姉妹の言動に苦しめられたことを回想している（「私の守護天使」）が、モースもまた子供の時、急死した兄の葬儀に際し、洗礼を受けなかった兄は地獄の業火に苦しめられると牧師が説教したことに深く傷ついたという[3]。そしてハーンが大叔母のカトリック教育に反撥したように、モースも父親の厳格なピューリタニズムに反撥して育った[4]。日本におけるキリスト教宣教師の教化的言動に違和感を覚えた二人には、似た幼児体験があったということになる。

だが一番大きな共通点は、庶民の生活に関心を寄せたことだろう。ハーンがその作品に描いたのは名もない市井の人々の物語であり、古い民間伝承や民間信仰をもっぱら書き留めた。モースも、立派な寺院や城郭や庭園には興味を示さず、普通の日本人が実際に暮らす住まいをとりあげた。そしてハーンもモースも書物を通した研究ではなく、直接自分の目で見、自分の耳で聞き取ったことを記述することを重んじ、消え去ろうとする昔の日本の面影をとどめていた明治日本の姿に愛着をもった。

民俗学者の宮田登は、モースとハーンは「それぞれ印象深く当時の日本人の生活記録をのこし、貴重な民俗資

料となって」いる二人の著作に、のちに日本民俗学を体系化した柳田国男も目を留めたはずだと述べるが、[5] 民具を収集したモースと、民話や怪談の再話作品を残したハーンのそれぞれの仕事は、「もの」の民俗学と「こころ」の民俗学として対をなすといえるほど、呼応するところがあった。

このハーンとモースは直接の面識はなかったものの、互いの著作は読んでいた。ハーンは、『知られぬ日本の面影』のなかのエッセイ「日本の庭にて」「神棚について」や、『仏の畑の落穂』のなかの「大阪にて」で、モースの著作に言及している。[6] 一方、モースもまた、「日本人の精神を描くのにもっとも成功したのはラフカディオ・ハーンである」とハーンの著作を評価し、[7] ハーンからモースに宛てた丁寧な礼状（一八九六年九月二十一日付）も残っている。[8]

このように日本という異文化に対する姿勢において共鳴するところがある二人がそれぞれ書き残した日本の第一印象が、ハーンの『知られぬ日本の面影』冒頭の「東洋の土を踏んだ日」と、モースの『日本その日その日』の第一章である。

ハーンは「第一印象をなるべく早く書きとめるように」という助言を受けた、と書き起こし、モースも「心から新鮮な印象が消えぬうちに書き始めよ」というホーソンの言葉を引いている。[9] 両者とも、初めての印象ほど魅力的なものはなく、読者に伝えるべき大切なものだと考えたのだろう。到着早々、朝から町に繰り出すことで、話が始まる。

二、人力車の風景 ― 『日本その日その日』と「東洋の土を踏んだ日」

先に来日したモースの方から見ていこう。明治十年（一八七七年）六月十七日の夜、「小舟はやっと岸についた。私は叫びたいほどうれしくなって、日本の海岸に飛びあがった」「すべてが新しく珍しい景色を眺めたとき、何という歓喜の世界が突然私の前に展開されたことだろう」[10]というモースは、翌朝、早速、横浜の町を見物に出かけた。

日本の町をさまよい歩いた第一印象は、いつまでも消え失せぬだろう。――不思議な建築、極めて清潔な陳列箱にも似た、見慣れぬ開け放しの店、店員たちの礼儀、様々な細かい物品の新奇さ、人々の立てる奇妙な物音、空気を充たす杉と茶の香。我々にとって珍しくないものとては、足下の大地と、暖かい輝かしい陽光くらいであった。ホテルの角には、人力車が数台並んでいて客を待っていた。[11]

モースは、人力車に目をとめるが、人間が引く俥に乗ることを申し訳なく感じて、歩きだす。だが、いざ乗ってみると、車夫の力強い走りに魅了されてしまう。そして、「それにしても人力車に乗ることの面白さ！狭い街路を全速力で走って行くと、人々、衣服、店、女や子供や老人や男の子たち……これらすべてがかつて見た扇子に描かれた絵を思い起こさせた」「人力車にのることは絶え間なき愉快である。身に感じるのは静かな上下の動

きだけだ。速度も大きい。[12]」と繰り返し記すモースの文章からは、人力車の躍動感とともに異国の街の賑わいの中を行く楽しさが伝わってくる。

そして十三年後の四月に横浜に降り立ったハーンもまた、モースの喜びをなぞるように、「初めて日本の町を旅する、甘美な驚きの感情」の声を上げる。穏やかに晴れた春の朝、「大気全体が、こころもち青みを帯びて、澄み渡って」いて、その柔らかな冷たさは、「雪におおわれた富士の頂から波のように寄せてくる風のせい」だとハーンは感じる。そして「見るもの、聞くもの、新鮮で、いいようもなく愉しいから、どこでもかまわない、とにかく連れていってくれ」と俥屋に身ぶり手ぶりで伝えて、ハーンも人力車にのって、町に繰り出す。

陽射しは暖かに快く、人力車は、世にこれほど小じんまりと寛げる乗り物があるかと思う。わらじ履きの俥屋のかぶっている白いきのこのような笠が上下に揺れて、その笠越しに見晴るかす町並みの魅力は、これまた見飽きるということがない。

小さな妖精の国――人も物も、みな、小さく風変わりで神秘をたたえている。青い屋根の下の家も小さく、青いのれんを下げた店も小さく、青い着物を着て笑っている人々も小さいのであった。[13]

モースの日記と同じように、ハーンが描く横浜の第一印象も、異国の風物を見ていく心地よい興奮にあふれている。もちろん、生物学者の日記と比べて紀行文作家の文章が技巧をこらした表現なのは当然で、ハーンが、大気と光を「青」の色調でとらえ、家々の屋根やのれん、人々の着物にも青の形容を重ねているところに、青のヴ

ァリエーションで光の質感を表現した印象派絵画の影響をみることもできよう。また、たとえば、車夫の「きのこのような笠」という形容は、引用した箇所のあとに、「ここに北斎画中の人物が歩いている。蓑を着て、大きなきのこのような笠をかぶり、わらじをはいて……」[14]と繰り返されて、読者のエキゾチスムを喚起し、「小さな妖精の国――人も物も、みな、小さく風変わりで神秘をたたえている」という表現も、当時の西欧の類型的な「小さな」日本のイメージを踏まえたものだろう。[15]

この冒頭の一節で、ハーンは青みを帯びた空間のなかに人力車を登場させた。ハーンの視界のなかで、車夫の白いきのこのような笠が上下にゆれ、ハーンはモースと同じように、その車夫の笠越しに、町並みの魅力をとらえていく。そして「東洋の土を踏んだ日」という作品は、「チャ」と名乗るこの車夫の俥で、横浜の街を走り、近隣の寺や神社を次々と尋ねて歩いて、夜、宿に戻って一日が終わるという構成になっているのである。

人力車の車夫は、それぞれの横浜探訪記のなかで、重要な役を担うのだが、それ以外にも、モースとハーンが同じように目をとめ、書き留めた事がらは少なくない。

たとえば、ハーンは、「東洋の土を踏んだ日」や「神々の国の首都」のなかで、下駄の響きを美しく描写しているが、モースも横浜に上陸してすぐのこと、道行く人々の足元を見て、「木製の下駄や草履が立てる音は、どこかしら馬が沢山橋を渡る時の音に似ている――このカラコロいう音には、不思議に響き渡る、どちらかというと音楽的な震動が混じっている。[16]」と、日本の下駄の音に注目していた。モースが芝居見物にいくと、「何やらまるで見当もつかぬような漢字をぎっしり書いた細長い布や、派手な色の提灯や怪奇な看板の混合で装飾された奇妙な建物が劇場なのである[17]」と目を見張り、ハーンもまた、「俥の上から見下ろすと、目の届く限り、幟がは

ためき、濃紺ののれんが揺れ、どれにもみな日本の文字や漢字が書いてある」と、商家の看板や職人の法被などに漢字の意匠が乱舞する様を描いている。

また、ハーンは、一日の終わりに、夜、宿で外から聞こえてくる「あんまーかみしも　ごひゃくもん」という按摩の呼び声に耳をすませるが、モースもまた、「昼夜を問わず、哀れっぽい調子の笛を聞くことがある。この音は盲目の男女が按摩という彼らの仕事を知らせて歩くものである。[18]」、「盲目の娘がバンジョーの一種を弾きながら歌を歌ってゆっくりと町を歩くのをよく見た[19]」と、按摩や門付けの女の姿を書きとめた。もっとも、横浜の町を行く盲目の按摩の存在には、来日外国人の多くが言及している。彼らは按摩の制度、つまり、障害者が自立して社会のなかにしかるべき場所をえているという点に感心し、たとえば、エドウィン・アーノルドは「日本の街路でもっともふつうに見かける人物のひとつは按摩さんだ。」と、その「物悲しい笛の音」について語り[20]、B・H・チェンバレンは『日本事物誌』に「按摩」という項目をもうけた。ビゴーによる按摩のスケッチをはじめ、写真や挿絵も多く残っている。

人力車にのって横浜探訪の一日を描いたモースとハーンの文章は、このようにその枠組みも、取り上げる素材も似ているといえる。だが、そこに展開する景観は、対照的といえるほど異なった印象を残す。

三、開かれた世界　―　細部の豊かさ

『日本その日その日』におけるモースの記述が生彩を放つのは、「狭い路は、更に興味が深い。人力車は速く走

る、一軒一軒の家を覗き込む……」[21]と、家々や人々の暮らしぶりの細部を描くときである。

モースは何より、家の開放的なつくりに驚きを隠せなかったのだろう。「風変わりな開け放した店（quaint open shops）」[22]、「小さな店は、あけっぱなしの小屋（open sheds）を連想させる」[23]、「店も、奥にある部屋も、道路に向かって明けっぱなしになっている（wide-open to the street）ので、……店の家族が食事をしたりするのが丸見えだ」[24]、とモースは、「open」という形容詞を繰り返す。渡辺京二『逝きし世の面影』によれば、モース以外にも、当時の外国人の多くが、庶民の家屋と生活があけっぴろげであることにびっくりしている[25]。だが、そうした人々のなかで、モースはあきれるのではなく、大いに喜んで、通りに面して開け放たれた家々の中を覗き込み、店であれば棚に並べられている品物を、お客と店の主のやりとりを、その奥で家族がすごす部屋のつくりや道具類を、人々の生活の様子を活き活きと、書き留めていく。母親が往来の真ん中で堂々と（openly）子供に乳房をふくませる姿をみかけると、「この国の人々がもつ開放感（utter freedom）こそ、見るものに彼らの特異性を印象づける[26]」とも述べた。

モースにとっての日本とは、何よりも自分に対して開かれた世界だったといえるだろう。自分を迎え入れるかのように、警戒心もなく、すべてを見せてくれる世界である。その印象は、近郊の村を通ったときにも変わらない。風景のなかに神社仏閣が点在して実に絵画的だ、とモースが思っていると、お寺では、学校の授業が行われていた。「そのお寺は大きな木の柱によって支えられ、まるで開け放したパヴィリオンのような形なので、前からでも後からでも素通しに見ることができる[27]」とモースは述べて、子供たちの賑やかな勉学の様子を温かい目で描く。寺や神社でさえも、奥の方まで見通すことのできる、開け放たれた世界として映ったのである。

そして、その「開かれた」世界を、モースは、庶民の生活の細部を彩る品々の豊かさと多様性の記述で埋め尽くしていく。

「人力車に乗って町を行くと、単純な物品の限りなき変化に気がつく。それで、ちょっと乗っただけでも、興味深く、面白がっていられる。二階のある家でいうならば、二階の手摺だけでも格子や彫刻や木材に自然が痕をとどめた物の数百の変種を見せている。」[28] とモースは目をみはり、自身のスケッチをそえて次々と解説する。あらゆる所で観察力を発揮し、たとえば、竹が様々な物に素材として用いられていることや、箸を食事の時に使うだけでなく、鉄箸で炭をつかみ、宝石商は細工に使い、往来では掃除夫がごみをひろう、という応用の幅広さに感心する。[29] 横浜の市場を訪問したときも、「興味深い光景の連続」だと感嘆し、「いろいろな形の変わった桶や皿や笊を見るだけでも面白かったが、それが鮮やかな色の、奇妙な形をした、多種の生魚で充ちているのだから、じつにユニークだ」と、道具と魚介類を列挙し、「種類の多さ」に感じ入る。[30]

「面白い」「興味深い」といかにも嬉しそうに、眼を輝かせながら、こどものように素直な感嘆の言葉を繰り返すモース。道具備品類の多様さを見出す眼差しは、生物の多様さを見出す博物学者の眼差しだといえるだろう。そして、生活における道具の工夫や応用と発展性に感心するのも、動物の環境適応能力や生物の進化に注目するところに似ている。たとえば、前述した下駄の音の響きについても、ハーンが日本人の足元をみて、ギリシャの壺絵にえがかれた人々の足を連想する（「神々の国の首都」）のに対して、モースの場合は、下駄の履物としての造りとその種類に関心が広がっていく。芝居小屋の幟の漢字に関しても、ハーンが漢字の絵画的な神秘性を捉えるのに対して、モースの言及は先の引用部分のみで終わり、芝居中、蝋燭を先端にたてた長竿を子供が持って役者

の顔を照らすことなど、舞台照明の道具の方に注目している。

『日本その日その日』全編にみられる、こうした目にみえる「もの」の多様性と機能に対するモースの観察が、帰国後、『日本人のすまい』にまとめられる。日本民家研究の嚆矢とされるこの著で、モースは家の構造や造りだけでなく、室内、調度品、風呂、便所、玄関、門、庭の花にいたるまでを詳述した。

だが、モースの日記を読んでいて、印象深く心に残るのは、モースが描く情景の明るい広がりではないだろうか。興味深い品々であふれる町はすみずみまで清潔であり、人々は礼儀正しく正直であることを、モースは繰り返し指摘する。

軒を並べる家々は、質素だが「清潔で品がよく」、「あらゆる階級を通して、人々は家の近くの小路に水を撒き、短い柄の箒で掃き清める」。欧米と比べてゴミや廃棄物の処理がうまくなされており[31]、それゆえ衛生的で、病気が少ない。人々は風呂好きで、きれい好きである。

モースが特に感心したのは、行動をともにした人力車の車夫の礼儀正しく丁寧であることで、つねに微笑をたやさないし、動物はいたわる、アメリカの馬車屋なら喧嘩になるような場面でも穏便に事を収める[32]、と再三車夫の話が登場する。そして、日本の住まいでは鍵も閂もかけずにいることができる、「人々が正直である国にいることは実に気持ちが良い[33]」とモースは述べて、外国人は「日本人にすべてを教える気で」日本にやってくるが、数ヶ月もいれば、残念ながら教えることは何もない、「自分の国で道徳的徳目として課される善徳や品性を日本人は生まれながらに持っているらしい」と気づく[34]、という結論に達する。

モースは日本の社会を、近代の悪徳や弊害の未だ無い社会として捉えていたのだろう。アメリカで行った日本

の魅力についての講演には、モースなりの文明批評の意味もこめられていたかもしれない。だが、日本の家屋の開放性と、町の清潔さと、人々の心の明朗さを同列に同一のものとして記述するモースにとって、庶民の風景も、日本の住まいも、すべて、昼間の光に照らされた明るい世界だったのだといえる。

モースは、横浜から日光に向かったときにみた、ある村の風景を次のように描写した。

> 艶々した鮮紅色の石榴の花が、家を取り囲む濃い緑の木立の間に咲いている所はまことに美しい。路に接した農家は、裏から差し込む光線に、よく磨きこまれた板の間が光って見えるほど、あけっぱなしである。家屋の開放的であるのを見ると、常に新鮮な空気が出入りしていることを了解せざるをえない。（……中略……）
>
> 道路に添う美しい生垣、戸口の前の綺麗に掃かれた歩道、家内にある物はすべて小ざっぱりとしていい趣味をあらわしている。可愛らしい湯呑茶碗や土瓶急須、炭を入れる青銅の器、木目の美しい鏡板、奇妙な木の瘤、花を生けるための木製の茸形の器。これらの美しい品物がすべて、当たり前の百姓家にあるのである。[35]

モースにとっての日本の原風景がここにある。光がふりそそぎ、風が吹き抜ける。明るく、清潔で、開かれ、多様な品々もすべて見渡せる。それは、江ノ島の海岸で腕足類を採集して過ごした夏の日々にそのままつながる世界であり、また、目に見える現実世界を信じるモースのまなざしに応えて広がっていき、展開していく風景だともいえる。

（以下　次号）

［参考文献］

Lafcadio Hearn, “My First Day in the Orient” “Bon-Odori”, *Glimpses of Unfamiliar Japan*（『知られぬ日本の面影』）1894（明治二七）, Houghton, Mifflin & Co.

「東洋の土を踏んだ日」「盆踊り」（仙北谷晃一訳）平川編　『神々の国の首都』　講談社学術文庫　一九九〇年

E. S. Morse, *Japan Day by Day, vol. I&II,* Cherokee Publishing Company (repr.), 1990

E・S・モース『日本その日その日』（全三巻）石川欣一訳、平凡社東洋文庫

E・S・モース『日本人の住まい』斎藤正二・藤本周一訳、八坂書房、一九九一年

太田雄三『E・S・モース』　リブロポート社、一九八八年

守屋毅編『共同研究　モースと日本』、小学館、一九八八年

磯野直秀『モースその日その日―ある御雇教師と近代日本』、有隣堂、昭和六二年

R・A・ローゼンストーン『ハーン、モース、グリフィスの日本』　杉田英明・吉田和久訳、平凡社、一九九九年

西成彦『ラフカディオ・ハーンの耳』　岩波書店、一九九三年

内藤高『明治の音』　岩波新書、二〇〇五年

〔注〕

（1）　モースは、来日した年の八月二十一日に上野で行われた第一回内国勧業博覧会の開会式に出席し、その後もたびたび訪れて、出品された工芸品がことのほか気に入ったという。（磯野直秀『モースその日その日』九六頁）

（2）モース『日本人の住まい』、斎藤正二・藤本周一訳、八坂書房、一九九一年、九頁

（3）磯野直秀『モースその日その日』、一四頁

（4）「旧式なニューイングランドの習慣で育てられた者」にとって日本の日曜日は店にも町にも活気があって実に愉快な日だ（『日本その日その日』、二八頁）、とモースは述べている。

（5）宮田登「モースと日本民俗学」、守屋毅編『共同研究　モースと日本』、小学館、一九八八年、二二二頁

（6）ハーンの蔵書「ヘルン文庫」には、*Japanese Homes and their Surroundings*, New York, Harper & Bros. 1889 がある。

（7）一九〇〇年一月十日付 Boston Herald 紙に掲載の新渡戸稲造著『武士道』の書評。（太田雄三『E・S・モース』リブロポート社、一九八八年、二二〇頁）

（8）太田同右書による。手紙は Peabody Museum (Salem) が所蔵し、富山大学ヘルン文庫もコピーを所蔵。

（9）モース『日本その日その日』「諸言」、二十頁。

（10）同右、四頁

（11）同右、六頁

（12）同右、七頁

（13）仙北谷晃一訳「東洋の土を踏んだ日」、平川編『神々の国の首都』講談社学術文庫　一九九〇年、八頁

（14）同右、一八頁

（15）これまでも指摘されてきたように、「小さい」という形容詞を連発して、日本では風景も、町並みも、建物も、人間も、調度品も何もかもが小振りに出来ているとするのは、西洋の日本に対する基本的な共通認識の一つだった（横山俊夫 *Japan in the Victorian Mind*, 1987、最後の章、"Victorian Travellers in the Japanese 'Elf-land'"）。違うのは、たとえばイザベラ・バードが『日本奥地紀行』（*Unbeaten Tracks in Japan* 1880）のなかで横浜上陸後、はじめて見た日本異郷の風景（上）

の商店や人々の第一印象を小さくて醜いと記し、バジル・ホール・チェンバレンは『日本事物誌』（*Things Japanese* 1890）のなかで、日本文化のすべてが西洋文明と比較して、貧弱だと述べたことであり、それに対して、ハーンはこじんまりとして居心地のよい、美しい“fairy land”のようだと描く。

（16）モース、前掲書、十二頁

（17）同右、二六頁

（18）同右、二〇頁

（19）同右、四五頁

（20）Edwin Arnold, *Seas and Lands*, London, 1892, p457-8. 渡辺京二『逝きし世の面影』、葦書房、一九九八年、一七一頁。アーノルドは *Seas and Lands* の中で次のように述べる。「学理に従ったマッサージを行う者として、彼の職業は日本の目の見えぬ男女の大きな収入源となっている。そういうことがなければ、彼らは家族のお荷物になっていただろうが、日本ではちゃんと家族を養っており、お金を溜めて、本来の職業のほかに金貸しをやっている場合もしばしばだ。目の見えぬ按摩は車馬の交通がはげしいところでは存在しえないだろう。彼の物悲しい笛の音なんて、蹄や車輪の咆哮にかき消されてしまうし、彼自身何百回となく轢かれることになるだろう。だけど東京では、彼が用心すべきものとては人力車のほかにない。そいつは物音はたてないし、子どもとか按摩さんと衝突しないように細心の注意を払ってくれるのだ」。

（21）モース、前掲書、十二頁

（22）同右、六頁

（23）同右、八頁

（24）同右、九頁

(25) 渡辺京二、前掲書、一二七頁
(26) モース、前掲書、九頁
(27) 同右、四三頁
(28) 同右、二一頁
(29) 同右、三〇―三一頁
(30) 同右、三二頁
(31) 同右、三八頁
(32) 同右、三〇頁
(33) 同右、三四頁
(34) 同右、四〇頁
(35) 同右、四九頁